

アーサー・コナン・ドイル作  
伊豆野 良江訳

## クランバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

### 第十五章 ジョン・バーシア・ヘザーストンの日記(前半)

一八四一年十月一日、トゥール谷にて

第五ベンガル連隊および第三十三女王連隊、今朝前線へ向けて通過。ベンガル連帯と昼食をとる。故国からの情報では、フランシスとビーンという頭のおかしい連中が女王陛下の暗殺を企てる事件があったらしい。

今年の冬は寒さが厳しい見込みだ。連邦の雪線は千フィートも下降したが、山道は数週間は通れるだろう。たとえ道が遮断されても各所に兵站部を配置しているから、ポロックやノットの隊も持ちこたえるに違いない。エルフィンストーン隊と同じ轍を踏んではならない。あんな悲劇は百年に一度あればたくさんだ。

谷の入口からロタール河にかかる木橋のこちら側まで、二十マイル以上の連絡路を確保するのは、砲兵隊のエリオットと自分の任務である。対岸を守るのはライフル隊のグッドイナフ、両岸の総指揮は工兵部隊中佐シドニー・ハーバート。

わが隊の兵力不足のため、任務遂行はむずかしい。一個半中隊とインド騎兵一個中隊からなっているが、騎兵は岩石地帯では役立たずだ。エリオットは三門の大砲を所有しているが、部下の数人がコレラにやられたため、実際使用できるのは二門だろう(コレラにはトウガラシが効くのは実証済み)。

一方各輸送隊にはそれぞれ護衛がついているが、形だけでしかない。主な山道の谷にはアフリディ族やパサン族が住んでいるが、やつらは狂信者であると同時に抜け目ない盗賊で、いつ輸送隊を襲ってくるかわからない。たとえやつらが略奪をしても、我々が駆けつけたときには山の砦に逃げ込んだあとだろう。我々を恐れていない限り、必ず襲ってくるに違いない。

もし勝手が許されるなら、見せしめとして、すべての谷の入口に一人ずつ吊るしてやるのに。やつらときたら見るからに悪魔の化身だ。鉤鼻、分厚い唇、もじゃもじゃの髪、そして何よりも悪魔のような冷笑を浮かべている。本日は前線からの情報はなし。

十月二日

ハーバート中佐にせめてあと一個中隊寄こしてもらうよう要請しなければならない。もし急襲されるようなことがあったら、間違ひなく兵站線は断ち切られてしまう。

今朝、十六マイル以上離れた二地点から、土民軍襲来との急報があった。

遠い方の峡谷には砲一門とインド騎兵隊を率いてエリオットが、近い方にはわたしと歩兵と共に向かったが、誤報だとわかった。敵の姿は見当たらなかったし、ジェザイル銃の乱射に迎えられたが、一人も捕えることはできなかった。

もしやつらが手が落ちることがあれば、思い知らせてやる。高地の牛泥棒がグラスゴーの裁判所から受けると同じくらい無情な裁きを下してやるのだ。たとえ誤報だったにしても、このように立て続けに警報が入るのは、やつらが集結して何かを企んでいる証拠ではないだろうか。

しばらく前線から知らせがなかったが、きょう負傷兵の護送隊が通過した際に得た情報では、ノット隊がグズニーを占領したとのこと。黒い悪党どもはノットにたたきめされたことだろう。

ポロック隊からの消息はなし。

騎象砲兵一個中隊、パンジャブより到着。以前負傷して隊に復帰してきた者も数名混じっているが、皆士気が高い。顔見知りには軽騎兵のモイストンと、チャーターハウス校時代の下級生で、それ以来会っていないブレイクスリーだけ。

十一時まで戸外でポンチを飲み、葉巻を吹かす。

本日、デリーから転送されたウィルズ商会からの請求書が届いた。従軍していれば、こういつ面倒なことから解放されるものだと思っていたのだが、お支払いだけではないなら、直接そちらに出向くつもりだという手紙が添えてあった。それが本当なら、最も肝が太くて忍耐強い仕立て屋ということになるだろうが。

カルカタ・デイジー及びホブハウスからの短信では、マチルダが遺言により全財産を相続するらしい。喜ばしいことだ。

十月三日

本日、前線から朗報あり。馬をとばしてきたマドラス騎兵隊のバークレーによると、先月の十六日にポロックの隊がカプールに入城したらしい。その上、セル夫人は他の人質と共にシェークスピアによって救出され、味方の陣地に無事送られたとのこと。神に栄光あれ！

これで人質も町の略奪の問題も解決。ポロックがその狂った連中に怖気づくことがなければいいが。あんな町は灰にして塩でもまいておけばいいのだ。特にあの総督邸や宮殿は。バーンスもマクノートンをはじめ、命を落とした多くの勇敢な仲間にも、こうして同胞が仇を討ったのはわかってもらえるだろう。他の仲間が輝かしい活躍をしているのに、この侘しい溪谷にじっとしているのはなんとも辛い。たまにささいな小競り合

いがあるのを除けば、まったく取り残されている。しかし、いずれは我々の出番がくるはず。

わが軍のインド土官が一人の山地人を連れてきた。その男の話だと、土民軍が十マイル北方のテラダ峡谷に集結し、次の輸送隊襲撃を企てているらしい。この手の情報は信用できないが、まったくでたらめとも思えない。この男がこちらの情報を敵に漏らす可能性もあり、自分は銃殺すべきだと言ったが、エリオットの反対にあった。

戦争中は機を逃すことは許されない。わたしはどっつかずのやり方が大嫌いだ。この点、理にかなった戦いをしたのは、アイルランドのクロムウェルを除けばユダヤ人だけである。結局、男は捕虜として抑留し、その情報が嘘であることが判明した時点で処刑するという妥協案がとられることになった。

わが隊の力を示せる機会が早く訪れてくれることを願う。前線にいる戦友たちには、有り余るほどのバス勲位やナイトの爵位が与えられるというのに、責任ばかり重くて心労の絶えない我々はまったく置き去りにされている。エリオットはひょう疽（手足の化膿性炎症）にかかった。

この前の輸送隊が大箱に入った瓶詰ソースを置いていった。ところが、肝心のそれがかかる食べ物置いていくのを忘れたので、ソースをインド人の騎兵に与えると、酒のようにコップに注いでぐいぐい飲んだ。数日中に大輸送隊が新たに平原をやってくるのじゃ。

十月四日

今回は、どうやら山地人の証言は本当だったらしい。というのも、今朝わが軍の斥候二名からテラダ峡谷周辺に土民軍集結の報告が入ったからだ。隊長はなんとジマーンのやつだ。中立を守るといふ条件で、やつに望遠鏡を贈ってはどうかと政府に進言してやったというのに。こうなったらたまたまのめしてやるまでのことだ。

明日の朝、輸送隊が到着予定だが、それまで襲撃はないだろう。やつらが戦うのは名誉のためではなく、略奪のためだからだ。だが、いったん戦い始めると、実に勇猛果敢なところを見せる。自分は素晴らしい作戦を思いついたが、エリオットもそれに賛成してくれた。これがうまくいけば、まれに見る名戦法となるだろう。

作戦は以下のとおり。わが軍は谷を下って輸送隊と合流し、襲撃を見越して峠の入口をふさぐ予定だという噂を流す。そして、今夜のうちに行軍開始。輸送隊の駐留地に着くと、二百名の兵を荷馬車に潜ませて、再び輸送隊と一緒に出発。

護衛なしに北上してくる輸送隊を目にした敵は、わが軍はまだ二十マイル南の地点にいますかと思ひこみ、必ず襲ってくるだろう。そのときこそ、女王陛下の輸送隊に手出しをするなど、落雷を止めようとするに等しいことをたたき込むのだ。とはいっても、不安も大いにある。

砲二門は行商人の手押し車に見えるよう、エリオットが巧みに偽装した。輸送隊が発

射準備のできた大砲を運んでいるのを見れば、怪しまれるだろう。砲兵は大砲のすぐ後ろの荷馬車に乗せ、すぐ発砲できる状態にしておく。その前後には歩兵を乗せた馬車を配置。信用できる土民たちにも、偽の情報を伝えておいた。もし噂を広めたいなら、忠実な使用人に秘密厳守を誓わせてから、声を潜めて言うのが一番だ。

午後八時四十五分、輸送隊の駐留地へ出発。幸運を祈るのみ。

十月五日

午後七時、わが軍の大勝利だ！エリオットとわたしに栄光あれ！かつてこんな害虫退治を成し遂げた者がいただろうか。

精根尽きはてて、今帰還したばかりだ。だが、血と埃にまみれた体を洗ったり、着替えたりする前に、まずその功績を書面にして目で確かめずにはいられない。たとえそれが他人の眼には触れない日記であろうとも。どうせエリオットが戻ったら公式報告の起草をしなければならぬのだから、今その下書きとして詳細に書いておこう。ピリー・ドースンは「言い逃れ」「嘘」「公式報告」の順に程度が大きくなると言っていたが、少なくともわが隊の場合は大成功だから、誇張する必要などない。

我々は予定通りに出発し、谷の奥に近い駐留地に到着した。輸送隊には第五十四連隊の歩兵二個中隊が配属されていたが、十分な警戒でなんとか持ちこたえたにしても、この数では土民軍の不意打ちに対抗することは難しいだろう。しかし、我々が加わったからには、やつらなど恐れるに足りない。

輸送隊の指揮を執っていたのは、チェンバレンという名の若い有能な男だった。すぐさま彼に作戦を話し、夜明け前に出発する準備を整えた。輸送車は荷物が満載で、インド兵と大砲を乗せるためには飼料数トン分置いていかねばならなかった。

五時頃に車に馬をつけ、六時までに進軍を開始。護衛部隊はできるだけ距離を置き、いかにも輸送隊が無防備なように見せかけて敵を誘った。

土民兵が集結しているとの知らせが、嘘ではなかったことがすぐにわかった。幌馬車のカンヴァスの間から外を見ると、ターバンを巻いた頭が岩かげから見え隠れし、輸送隊の接近を知らせに、斥候が北へ走り去るのも目撃した。

しかし、そそり立つ絶壁にはさまれた薄暗いテラダ峡谷にさしかかるまで、敵はその姿を現さなかった。なかなか巧みに待ち伏せをしていたので、もし嚴重な警戒をしていなかったら、敵の術中にはまっていたかもしれない。輸送隊が行進をやめると、気づかれたことを悟った土民軍は、めくら滅法に猛烈な銃撃を浴びせてきた。

前もってチェンバレンには、部下を散開させて小競り合いをしながら、ゆっくり輸送隊へ後退し、敵をひきつけておくよう指示をだしておいた。この作戦は大当たりだった。わが軍が応戦しながら、できる限りゆっくりと後退し始めると、敵は雄叫びをあげて攻め込んできた。岩から岩に飛び移り、ジェザイル銃を振りかざしてわめいている様は、

悪魔の群れのような。そのあざ笑つようにゆがんだ黒い顔、猛々しい身振り、はたらく衣服。ミルトンの悪魔の概念を描こうとする画家にとつて、いいお手本になることだろう。

勝利を確信した土民軍は岩陰から姿を現し、マホメットの緑の旗を翻して、一気にだれ込んできた。好機到来！輸送車の隙間という隙間から、一斉に銃口が火を噴き、五、六十人の敵兵が兎のようにばたばた倒れた。残りの者は一瞬たじろいだものの、隊長を先頭に再びすさまじい勢いで突撃してきた。

しかし、我々の正確な射撃の前に、寄せ集めの兵隊はなすすべもなかった。隊長が倒れると、しばらく躊躇してから岩陰めざして逃走し始めた。今度はこちらが攻勢に転じる番だ。大砲の発射準備が整つと、ただちにぶどう弾が浴びせられる一方で、歩兵部隊がその合間を縫つて突進し、敵を射殺したり刺殺したりした。

これほど迅速に、しかも決定的に戦闘形勢が逆転した例は、珍しいだろう。最初のうち洪水後退していた敵は、慌てふためいて退却を始め、しまいに士気阻喪した土民軍は要塞へ向かつて散り散りに逃走した。

敵が掌中にあるからには、そうやすやすと逃がすわけにはいかない。それどころか、この際、わが軍の赤い軍服を見ただけで震えあがるくらい、とことん思い知らせてやるうと心に決めた。

敵軍のすぐあとを追つて、テラダ峡谷に突入。敵が態勢を立て直す時間を与えずインド兵と砲兵数名を連れて突進し、一個中隊を率いたチェンバレンとエリオットに両側を援護させた。しかし、ヨーロッパ式の動きにくい軍服や乏しい登攀技術が大きな妨げとなったので、もし幸運に見舞われなければ、追いつくことはできなかっただろう。

山道からは小さな峡谷が分岐していて、恐慌をきたした六、七十人がそこを駆け下りていくのが見えたが、それを捨ておいて敵の主力を追撃するつもりだった。しかし、駆けつけた一人の斥候から、その道は袋小路になっているから、引き返してわが軍と戦う以外、逃げ道がないと報告を受けた。

敵に心底から恐怖を味わせてやるには絶好の機会だった。主力部隊の追撃はチェンバレンとエリオットに一任し、自分はインド兵たちに道幅いっぱい散開させながら、じわじわと進んで行った。ジャッカル一匹でさえ、そこを突破することはできなかったにちがいない。もはや袋の中の鼠だった。

その隘路はなんと暗く、木気味だっただろう。両側には千フィート以上ある絶壁が迫り、わずかな隙間から差し込む光も、断崖の淵から垂れ下がる羽毛状のシユロやアロエにほとんど遮られている。

道の入口でも、絶壁と絶壁の間は二百ヤードも離れていなかったが、進むにつれてますます狭まり、横隊では半個中隊が進めぬほどになった。

奇妙な薄明かりがこの谷を包み、その中に巨大な玄武岩が幻のようにぼんやりと浮かびあがっている。もはや道はなくなり、地面の凹凸も激しくなったが、しばらく行くと、

左右の絶壁が鋭角に交錯する地点が見えてきた。自分は奮い立って部下に引き金に指をかけておくよう命じた。

その地点まで到達してみると、うず高く岩石が堆積して行き止まりになっている。岩間には、敵兵たちが明らかに戦意喪失した様子で身を隠し、抵抗するそぶりはまったく見せない。捕虜にしても仕方ないし、見逃すわけにもいかないから、全員始末してしまおうしかないだろう。

わたしが剣をふりかざしながら先陣を切ろうとしたとき、思いもよらぬ邪魔が入った。こんなに衝撃的な光景は、ドルーリー・レーン劇場でなら一、二度見たことがあるが、実際お目にかかったのは初めてだった。